

芸術祭十年を語る

時 昭和31年3月3日
場所 文 部 省

座 談 会

安 藤 鶴 夫
尾 崎 次 充
今 井 日 出 海
内 藤 普 三 郎
(文部省社会教育局長)

○日本 演 説

内藤(司会) 本日はお忙しいところを、皆さんお集まりいただきまして感謝にたえません。芸術祭もすでに十回を重ねまして、ちょうどこの辺で過去の芸術祭のあり方についていろいろと御批判もいただき、将来の展望と申しますか希望についてもお話いただければ、非常に幸いに存ずるのであります。

最初に昭和二十一年、敗戦の中から立ち上り、芸術界の新しい息吹きによって国民の精神をふるい立たせ、喜びと希望を与えたことは確かであったと思います。さらに昭和三十一年度には国際映画コンクールとか、あるいは地方巡回の予算も認められておりまして、一層期待されておるのでもあります。特に芸術祭のあり方について皆様から御批判もいただき、よりよい国民のものとして育てて参りたいと思いますので、本日この座談会を催したわけでございます。最初に今さん、創立のときのいきさつでもお話していただきますようか。

今 たたび創立のいきさつばかり話しておりますけれども、やはり十回重ねて参りましたについては、内容でなく時代の要請というものの大きな変化というか、進歩というか、この十年間というものは、日本は非常に大きな変化

の時代であったと思うんです。ですから、創立当時の話と、芸術祭の気持えというようなものが受け継がれていないし、また受け継がれるべきものでもないと思うんです。初めは昭和二十一年でございました。昭和二十一年と申しますと、第一米寄こせ運動とか、デモ隊が文部省の廊下にもどんでん赤旗を立てて通っていく、あるいは総理官邸などにも押しかけて、革命の一步手前みたいな状態でございます。そして、あのときの四、五月ごろの文部省のある人々の意見では、秋あたりになんかことが起るかからんぞというふうなことも耳にいたしました。そういう時だし、外はもう占領軍がわがもの顔に町を疾駆している。東京の劇場というものはほとんど被災されて、残っているのは東劇と帝劇ぐらいのものでございましたね。人心も虚脱するという言葉がはやった時代で、中国の動乱時の難民の姿そのままだったようです。そういうとき、私ども社会教育局で何とかしたいということから、芸術祭という名前が適当か不適當か知りませんが、そういう名前で、一つ日本の一番乱れたときに、芸術の伝統を正そうじゃないか、その当時は、また文化財保護ということもしていない時分でしたから、そういう意味もかねて伝統を正す。そうして、日本は敗れたりといえどもこれだけの芸術があるんだぞといつて、一つ占領軍のものにも見せてやりたいし、また当時の皆さんだ人心に感ずる芸術の姿を見せたいというふうなことが、大体芸術祭を起す趣旨だったと思うんです。現在はそこに芸術の普及、今後の育成ということも考えられているようですが、そういう夢はもろんなかったし、予算などももらえなかつたし、免税の特典もなかった。無予算で始めたものが次々と社会教育局全体、あるいは芸術家の働きで十年間も存続できたということは、芸術界のために非常に慶賀すべきだと思いますし、続けられるものなら、今後とも続けてやっていただきたいと思えます。ただ、現在のあり方というものについては、いつでも皆さんの批判を受けてよりよきものにしていただきたいと考えております。

内藤 創立のときは部門が割合少なかったようですね。今 少いのがいとは思いませんけれども、今は、少し織花主義に陥ってはいないか、やはり芸術という言葉に対しては相違きびしい解釈をしていくべきではないかと私は考えております。

内藤 大衆芸能とか、郷土芸能という部門がその後ふえただけですが、このいう点はいかがでしょうか。

今 賛成者の方の御意見を一度聞きたいですね。(笑)

安藤 私は芸術祭の始まった、ちょうど今さんが芸術部長のときに東京新聞の記者でして、インタビューしたんですが、そのときいきなり今さんがうっぱに意見を述べたことはなかったですね。(笑)

今 だいたい落ちぶれたかったね。(笑)

安藤 いやいや別な意味なんだ。実におりがたかった。今 内藤話ですけれども、実際、邦楽というものを初めて役所で知っている人はいないんですよ。それで実は安藤さんに、どのくらい知恵を拝借したかわかりません。

安藤 とんでもないですよ、ほんとうにうれしかったです。僕らもずいぶん袋のような服を着て、ぼろぼろの靴をはいてこの文部省の廊下を歩いてインタビューしたんですが、

今 ひどいことになったよ、あのころは。安藤 芸術なんという、それは全然日本にないように思っていましたね。あのとき一番感動したのは、富崎春昇さんが三味線をかかえて芸術祭の舞台へ出られて、あの目の不自由な方が箱根の山へなかに逃げられていたのに、その芸が少しも衰えず、まるで生まれたときから三味線をかまえておられるような、そういううっぱな演奏を聞かされて、あのひどい状態の中にこういう芸術が残っていたというこの感動でいっぱいになりました。

今 小磯さん、今の山城少操、この方もやはり世の中はどうなるかと思っておられたころ、芸術祭に参加してくれと言われたというわけで、非常に鉄道も不便だし、宿屋も

ないというのにはせめて下さったんですが、これにも私は感動しましたよ。向うも、いつあいつのものが置られるかという不安の時代でしたから、それも帝劇の舞台でやっていたんだんですが、御本人もとても感動しておられた。

安藤 あのとときは、戸板君が僕のことを書いているんです。戸板君と並んで坐ったのですが幕が開いてそこに小磯がいましたらだめになりました。聞くも聞かないもない、ただ涙が出てきてほんとうに困ったんです。戸板君も泣いていたようですが、あのとときは安藤がひどく泣きやがったとあとで書いていました。(笑) そういう人がただ生きていてくれたというだけでなくて、りっぱなものがあの戦争中にも持ち続けてくれたというこの感動、それに打たれました。それには、やはりあの戦争の最中にもあの慶應があった。たとえば山城の場合ですと、大阪で「断絃会」というものがあつた。これは武智鉄二君が私財を投ぜうつて、伝統芸術の保護を空襲の最中にやっていたんです。それから富崎さんの場合ですと、箱根の山へ北条秀司氏がときどき行って、三味線を聞かしてもらっていたそうです。そういう人が、やっぱりわきにいたということですね。

今 日本衰えすぎずな。

内藤 牛山先生、何か御感想は。牛山 私が芸術祭執行委員会に入りましたのは、割合に芸術祭が軌道に乗ってからです。日本に於ける将来性のある洋楽、洋舞、殊にバレエなどは、今安藤さんのおっしゃる通りに、あの戦火の激しい中を通して、陰でバックアップしてくれるようなものは何一つとしてなかったけれども、やはりこれは日本民族の偉いところでございます。あとの間に、それぞれ自分の芸術をしっかりと見失わないように身につけて、研究を続けてきておったようでございます。私は音楽の方を五十年近く見て来たのでありますが、終戦の年以前四十年間の進歩よりも、この終戦後の十年間の方がより大きい進歩を遂げていると思うので

ございます。それについては、文部省のこうした性格の芸術祭のような企てが出来たお蔭で、芸術家たちが、自分たちの平生それこそ命をかけて精進してきておるその成果を、公式という何ですが、公けの形で発表して批判を受ける。こういう機会を与えて下さったことは、大へんよい刺激になったと思います。

尾崎 僕は安藤君より長く新聞記者をやっている、今さんがお始めになったところは、新聞記者として拝見しています。そのとき大衆の一人として、芸能という言葉がなくなつて、芸術という言葉が出てきたことが、非常にみずみずしい、何かよみがえつたような感じを受けました。僕はともかく芸能という言葉で復活したことが、大衆の一人として一番うれしかった。芸能という言葉と同じように、私なんか関係してきた新劇の世界というものが、統制と弾圧を受けて、昭和十五年には一度つぶされてしまった仕事です。それが戦後、統制とか弾圧がなくなつて、とにかく芸術祭というお祭にどうやって参加するかということ、非常に興味を持って見ていたのです。そして二十四年に田村秋子さんが「ママの貯金」で賞をもらっています。それから二十六年に民芸の滝沢修さんがもらっています。二十七年には、放送の方で宇野重吉君がもらっています。こうやって見ますと、滝沢さんにしては宇野君にしても、昭和十五年には一度牢屋へ入つた人たちです。田村さんともだんなさんの友田さんが戦死されたあと、信州の山の中に入って百姓をしていらした。片一方は牢屋で苦勞し、片一方は田舎にいて演劇から離れていた人たちです。そういう人たちが、戦争が終つて三、四年目から、たまたま芸術祭を通して出て来たときに、ほかの古典の方々と比べて劣らない、エネルギーをなくさないで持っていたというところは、一番大きな問題だったと思うのです。統制とか弾圧とか、あるいは官僚主義だとか、芸術祭が昔のようなことにならないで、よくここまでできたと思ひ

ます。

こういうように新劇は、戦前あいう苦しい目にあつていながら、二十五年から積極的に参加してきている。それが同時に新劇の普及だとか、新劇のあり方を非常にかえてきていると思います。

それからその中で選ばれた賞を見ましても、滝沢修から始まつて、二十八年はぶどうの会がもらっています。そういう賞のもらひ方の中でも、特に去年、前進座の嵐芳三郎が賞をもらったということは、印象が強いのです。それはさつき言つたように、芸能という言葉だとか、統制、弾圧とかいうものを、とにかくこゝまで洗い落してきたということを感じますね。

それからもう一つ、私は演劇の場合、創作的な仕事は芸術祭の中に出てくるのが一番望ましいと思うのです。それが新劇の方では、二十七年になるとほとんど創作劇が参加しています。これも大きな特色だと思うのです。

僕は途中から大衆芸能の方に関係したのだけれども、そのとき思つたことは、芸術祭というものがだんだん変わつてきて、そろそろフェスティバルになつてきたように思うのです。そこに大きな問題が出てきたような気がするのです。去年もおとしも、送つてもらっている大学新聞の芸術祭について学生が書いている原稿を見ますと、みんな一致して、どこに大衆性があるのだ、どこが大衆のために芸術祭が行われているのだという疑問が一番多く出ています。これが今年、あるいは来年からの芸術祭の問題となつてくるし、性格をきめてくることになるのではないかと思います。

◇何が 大衆か

牛山 大衆というものの本態だつて問題になる。

尾崎 大衆芸能、郷土芸能という言葉が……

内藤 大衆芸能、郷土芸能というものが、どういふふう

に理解されているか。それから大衆との結びつき、この問題どうでしょう。

尾崎 僕が読んだ感じでいくと、学生は一種の特権階級であるけれども、学生の観客として非常に関心を持っています……

今 それが僕は問題だと思ふ。ほんとうに見たいという関心か、そういうことを論じている楽しみか。僕はどちらも後者だと思ふんですがね。

内藤 今先生は純粋芸術に限って芸術祭をやるべきだという御意見のようすけれども、安藤さんの御意見はどうですか。

安藤 私は落語も純粋芸術だと思ふ。ただ落語全体を純粋芸術だとは言わないので、非常にすぐれた技を持った落語家の落語というものは、ほかの芸術に比べてもりっぱなものであるということです。

今 賛成です。しかし安藤さんの言つたことは非常に注意すべきことで、落語一般という誤解がある。たいこもちの踊りなども、ちっとも卑下すべきものじゃない、りっぱなものです。

安藤 マルセル・マルソーですよ。

今 マルセル・マルソーを連れていったら、日本にこんなものがあつたのかつて、びっくりしてましたよ。マルソーもやはりあれはサーカスの踊りですからね。それをマルソーが芸術にした。だから衣装はちよつと変えているけれども、道化役の顔だし、フランス語でタリンというのですが、伝統的な顔でしよう。それを芸術にしたのであつて、タリン全体が芸術じゃない。

尾崎 その操作が問題なんですね。

安藤 逆もまた言えると思ふんです。たとえばスタンダード・ミュージックだから芸術だ、それをやっている人たちは芸術家であるか。僕はそれをどう演奏するかによつてきまらなく思ふんですが、ジャンルできまるのですか。

今 きまらなく思ふんですね。実際にいって、今まで歌

尾崎 こういうものの意味が、そろそろ問題になつてくるのじゃないですか。

今 僕の考えは始終一貫変らない。つまり、端正な風俗というものは乱れてくるものです。芸術も一番いいものを出していれば、大衆の方はそれを大衆的なものにして楽しんでる。それまで芸術の中に入れる必要はないと思ふんだ。芸術の鑑賞というものを厳しくこしらえて、それを文部省がやればいいのであつて、文部省の教育と連うのですからね。一方にそういう国宝というようなものを保存しているものがあるのだし、やはり芸術院というものは、だれでもかたでも、カポレの名人まで入っているわけじゃないのですから、固然と分けた方がいいのじゃないか。個人の意見ですけども、そう思ひます。

安藤 今の学生が、芸術祭を自分たちのものだといふうに身近に感じないという理由の中には、八百円出してというふうな入場料の問題が、大きく押しているわけですね。今 フランスなんかでは、芸術祭というものはありま

んけれども、国立劇場で月曜日に、古典を学生のために安くしている。そういう便宜がありますけれども、僕は学生が大衆を鑑賞する資格はないと思ふんだ。学生という特権階級で、大衆じゃありませんよ。(笑聲)

牛山 まさにそうですね。

今 教育的な意味で文部省の方ではお考えになればいいので、やはり芸術祭というものと、今の学生の意見とは違ふと思ふんです。

安藤 僕は学生のと看から、ちゃんとお金を払つて文楽を聞いていますし、そういう学生もあるわけなんです……

(笑聲)

今 学生のために大衆的なものを見せるのじゃなく、これから国立劇場もできるでしょうから、フランス的に月曜日は半額にしてやるとか、学生席を設けてやるということですね。これはまた別なことだと思ふ。

安藤 どこかの入口で、芸術祭の扉をたたこうとするけ

舞伎俳優というのは、芸術院会員になれなかったのですからね。

安藤 だから僕は、話し家が芸術院に出てきてもいいと思います。

今 自分ではそういう考えを持っています。去年ですか、テレビで大江美智子を見ましたけれども、ちゃんばらをやらないのです。(笑) 芸術院参加のためにたくさんあって、彼女が得意なものを全然しない。

安藤 音段やつている銅像を、なぜやらないのですかね。

今 芸術院というものに迷ったのだから。舞台上に色気がない、あばれるところがないっていったら、大衆の芸術にもなりやしないよ。

安藤 そういう間違いが多いと思います。

今 郷土芸術というのは、ドイツなどにもございますね。われわれが見て、いいものだなと思うようなものは取り上げてくれるけれども、郷土芸術全体としては取り上げておられませんよ。

内藤 今度日本青年館でやった郷土芸術はどうですか。

安藤 僕はいつもいのですが、あれは大へんりっぱな仕事で、一堂に集めて見るということは、芸術院の楽しみの一つなのです。しかし参加してくる人の中に、たとえばびかびかに光った新しい衣装を着てくる。そうじゃなくても、自分の土地で、お父さんもそれを着ていた、おじいさんもそれを着ていたという衣装があるに違いない。それを何かきれいなものの方がいいのじやないかというの、非常に単純な考え方で、郷土色を失ってしまう。これも間違いだと思ふ。赤い布一つでも人絹のようにびかびかして、新宿あたりのマーケットで売っているようなものだったらいけない。その考え方が、やはり雲に響いています。だから純粋郷土芸術というものが保たれないで、田舎レビュウの影響を受けたようなことになります。ああいうときに鑑賞するというのは、純粋なものが残っているという

雄を聞きたければ、そういう運動が起きますよ。そこでやってやるということが必要だと思ふ。

内藤 それはそうですね。その場合に少しでも安く見せる、何と云っても、地方は経費がかかるから、会場費を多少持つてやるとかしないと、ペイしないのじやないかという問題もあります。

今 僕は東京に大学があるのと同じように、文部省がそういうことをしなくともいいと思うんだ。今、風俗でも町の様子でも、地方的特色がなくなつて、みんなすらん通りとか、何とか銀座をこしらえていますからね。

内藤 しかし田舎の人は東京へも行きたいです。東京の銀座も歩きたいし、歌舞伎座へも行きたいが、金がなくてなかなか行けない。一生に一本でいいから東京の歌舞伎座を見たい、という人がたくさんいると思う。だから地方で安く見られ、地方も希望するなら、そういうものを作ってやるのが……。

今 そうすると、日本の各都市に国立劇場を作らなければならぬ。

安藤 それは国立劇場の中の仕事だと思ふ。

今 芸術院というものが、芸術の大本山になつては困ると思うんだ。これは芸術院とは別なんだし、文化財保護委員会の仕事でもない。これはまた別の仕事であつて、それに附随するいろいろな地方文化とか大衆芸術というようなことも、十分お考えになる必要はあるけれども、芸術院として考えるべきかどうかは疑問ですね。

安藤 そう思ひます。

今 たとえば、邦楽の晩なにかに文楽など入れてもいいのじやないか。文楽が入つても、そういうプログラムの編成をしないんだ。けれども、落語全部も直ちに芸術院に参加させようというふうにだんだん広げていくと、芸術院というものが、新聞なんかでもだんだん麻痺されて、芸術の高さというものを失せているのかどうかかわらなく、刺戟がないですよ。

ことになります。

内藤 もう少し厳選する必要がありますね。

今 相当の方々が、東京の識者に見せてやりたいというようなものならいいんですが、郷土芸術何でもかいいということになると……。

安藤 山の中の宿屋でおさしみが出てきたりするのは、ちつともうれしくない。やはりその土地でとれたワラビや竹の子の方がうれしい。

牛山 昨年の琉球舞踊で、琉球からきたのはよかったが、こつちのは後に背景なんか描いたりして、レビュウ的な演出をしている。ああいうことはしてはいけない。

安藤 そのままがいいと思ふ。

内藤 今の尾崎さんのお話のうち、フェスティバルとはんとうの意味の芸術祭とが一緒になっているような気がします。あるということがありますが、これはどうなんですか。今 日本は革命記念日をパリ祭と訳しちゃったくらいだから……(笑) 芸術祭といったことは、たしかにうまい名前じゃなかった。

牛山 しかし芸術祭はいいと思います。

安藤 フェスティバル精神はいいと思ふ。

内藤 芸術祭としては、やはり日本の芸術活動を高めていくということが、一番大きなねらいでしょうね。その点はどうですか。

牛山 文化を中央に集中しないで、全国的にするということも大事ですからね。

今 だけど、地方でもみんな果して歌舞伎を見たいか、富崎さんなんか聞きたいかということになると、これは別だと思ふんだな。

安藤 たとえばこの間の例だけれども、飛騨の高山に文化会というのがあつて、宮城道雄さんを高山へ呼んだ。そうしたら、宮城さん非常に感動されて、そのとき二十曲近く演奏されたそうです。宿屋の舞台でしたが、そのあと石井渡さんも、桂三木助も行っています。つまり、宮城道

安藤 おとしは普通の寄席の興行か何かに参加したが、だめなんです。だから去年は、考えまじし、申込みもありませんでした。結局、落語研究会とか、三越落語会とか、演者以外にちゃんとした有識の責任者を持つている会が残りました。

○よい作品を生むには

内藤 芸術祭に応募した作曲なり脚本が、あとで上演されないようなものなら、やはりあまり価値がないものなのでしょうね。それを奨励なり、文壇なりへの登竜門として、少くともその作品が、あとで必ず上演されるようなものであつてほしいと思ふのです。

今 それは無理です。そんなものはめったに出ません。年中行事でやっているのですからね(笑) 毎年、すごい古典になるようなものができたら、僕などつくづく願っています(笑)。

安藤 中野実の「明日の幸福」は、応募作品じゃないけれども二度上演していますね。

今 中野はあれだけたくさん書いていても、あれはほかにないくらいいいですよ。

安藤 そうなんです。そこがなかなかできない。

今 同じ人でも、いいものというのはなかなか書けない。中野は、だれに合して、何分でやれといわれたら、やれる人でしょう。職人ですよ、それが悪くいえば偶然できたようなものです。だから、そう毎年あんなものが出るとはとても考えられないですね。

内藤 ですが、快心の作を出したときに応募していただくか……。

今 応募じゃなくて、委嘱ということもあるでしょう。

内藤 今公募をやっているが、公募でいいものが出なければ、委嘱ということになる。公募した場合に、これが楽壇なり文壇への登竜門だということになれば、世間の評価が違つてきて、一つの意味がある。さもないければ、二、三年前ごろから、先生方に委嘱してやつてもらおうという手も

あると思うのです。

今 フランスの例をたびたび引くけれども、いろいろな文学賞の中で一番振わないのは、アカデミー・フランセーズだけです。それは民間の賞の方が、いいものが集まるので……。

内藤 そういうような気がするが、どうしたらいいでしょう。

牛山 アカデミー・フランセーズは、どういうわけで振わないのですか。審査員に対する何か……。

今 そればかりじゃなくて、ほんとうに文学をやると思うなら、あそこには坊さんもあるし、いろいろなものが入っているから、そんなものにほめられたって、何にもなりません。やはり安楽な文学者ばかりのセンスの中に応募したいということになる。

内藤 公募した方がいいのか、委嘱した方がいいのか問題だと思うのですが、先生方のお考えはどうですか。

安藤 予算が許せば、両方はいですね。

今 できればいいけれども……。

安藤 既成の人たちに、ほんとうに力のごもったものを書いていただく。それから新しい人を発見する方法として、これはどうしても両方必要だと思います。

今 たとえば中野君、川口君それから北条君なんかを委嘱して、三劇団でやっても、一つの劇団でやってもいい。それで、どれに賞をやるかということにしたら、おもしろいと思う。これはわかりますよ。

内藤 委嘱しておいてね。

安藤 そのときに、委嘱したいような人というのは、みんな忙しい人たちのなかから、ほかの仕事がある程度断わっても、それに打ち込み得る時間をかけられるだけの経済的な問題ということがある。

今 しかし、三人なり五人なりに委嘱して、それで上演の方は……。

安藤 上演は、それが条件なのだからもちろん大丈夫

だ。そうではなくて、その本を書くのに、一体どれだけの時間をかけるかということが……。

今 それは書いたやつで罪ですよ。(笑) 引き受けた以上は、どうも忙しくてねということの問題にならない。

安藤 その場合にでも、松竹なら松竹がくれる脚本料よりも、その一つのために時間がかけられるくらいのお礼を差し上げたいと思います。

今 どうも私、文部省にいて貧乏したから、金をくれと言われると、考え込むことがついている。(笑)

宇野 (芸術課長) 今でも貧乏です。

安藤 芝居の場合、りっぱな作家でいいものを書いておいて、今度栄如としてつまらないものを書いたというのは、時間の制約で、一つの作品にこれないというのが、非常にじゃまをしているのじゃないかと僕は思います。十の仕事を、七つなり六つにして、それに打ち込めるということにすれば……。

今 芸術祭ばかりじゃなくて、一般にやつていただきたい重大なことだね。

牛山 人にもよりますね。忙しい中を、りっぱなものを書く人もいます。

内藤 今先生、さっきお話のように、既成作家で一流のメンバーに委嘱した場合に、受けられるでしょうか。

安藤 受けます。

今 文部省ばかりでなく、松竹でも受けますよ。

尾崎 劇団と手を組んでやれば、完全ですね。

安藤 ことは第五郎劇団のためにだれを、吉右衛門劇団のためにだれ、新派のためにだれというふうだね。

今 ある期間に上演するというので話し合いがつけば、辞退する人はないと思います。それが上演されて第五郎劇団の方がよかった、安藤さんの方がよかった。それに賞を与えるということになれば、賞にはずれた人たちも、みんな喜んで拍手に行きますよ。

僕は提案したい。

宇野 洋野の方で、江口さんの「プロメテの火」が再演されていますね。

今 ほんとうに、芸術祭だからといって気ばっちゃって、つまらないものが多い。だから安藤さんのいうことは、非常にいいと思います。

今 予算は大分ふえたのですか。

内藤 少しふえました(笑) それから映画など、その期間中の製作のもので、一年間のいいものを、もう一ぺん芸術祭に参加させたらどうでしょう。

今 やはり映画会社の実態は、芸術祭を目ざして作っています。松竹があれば、うちはこれでいいというので、非常に気ばっている。一年中ということになれば、作らなくなります。だから映画はあれでいいんじゃないですか。芸術祭賞というのを、今度はうちだとかいって競争していますよ。

安藤 僕もそういう気分が映画にあり、放送にあると思う。

内藤 それは非常にいいことですね。

安藤 そういう精神を持って作ったところは、よくなっています。

今 僕が芸術祭でたった一ぺん感動したのは「忠臣蔵」ですよ。

安藤 二十二年でしたか。

今 それこそ涙が出た。芸術祭という名で、あれだけの役者を網羅して、しかも「忠臣蔵」のできないときにやれたときは……。

安藤 菊五郎、吉右衛門、幸四郎、梅玉、宗十郎、全部死んじゃった。これは大へんな「忠臣蔵」でした。

今 それを考えると、芸術祭というものは、批判されながらいいところもある。

安藤 ありますよ。

牛山 功罪比較すれば、いい方が多いと思います。

芸術祭授賞式

ことしの芸術祭授賞式は、ひろく一般に芸術祭の意義を認識してもらうとともに、はえある受賞者を一般に周知させ、芸術祭に賛する目的から、とくに日比谷公会堂を会場として、十二月二十二日午後一時から開催された。

式はまず内閣社会教育局長のあいさつに続いて芸術祭執行委員長高橋誠一郎氏の経過報告があつてのち、各部門ごとに授賞式にうつり、内閣文部大臣の手からそれぞれ賞状および賞金がはえある受賞者および団体に手わたされた。

ついで、第二部の芸術祭受賞映画の鑑賞会に入り、まづ製作者佐藤一郎氏の監督豊田四郎氏等のあいさつがあつてのち、受賞映画「夫婦善哉」が上映された。午後四時すぎ盛況のうちに終了した。

今 内藤さん、どうかよろしくやって下さい。
尾崎 新劇でも「ツダガブラー」なんかめったに見られませんか。
安藤 芸術祭が生まれたときの精神をときどき思い出して、芸術を作っていく。育てていくという精神に戻らなければいけないと思う。

それから、芸術祭に出ておかないと、一年間が芸術でないような(笑)。そういうものが少し多過ぎる。芸術祭の精神をほんとうにつかんでほしい。実際に賞を与えられているような人の中には、多少妙なのも、そろそろこれじゃないかなというの出てきたりしていますが、そのときだけいいのじゃなくて、ずっとつづいてほしい。普段の点が入っています。
内藤 芸術界のほんとうの意味のコンクールができるといいでしょうな。
今 役者なんか、非常に十一月というのは気にしています。猿之助でさえ、これというものがなければ、休んだ方がいいという。

安藤 猿之助くらのえらい役者になれば、よろしことしの芸術祭は、ということでもやってもらいたいと思う。
今 前にもどるけれども、やっぱり一年中という、だけれちやいます。
内藤 そうでしょうね。
今 安藤君の言うように、二日かその公演で終わってしまったもので、よかったというのをやるということはないと思う。
安藤 今は踊るだけのジャンルを言いましたけれども、ほかにもあると思うのです。
内藤 バレエみたいなものですね。
牛山 おはんさんのものは、その次にやってもらいたいですね。

今 藤原義江さんは、私が文部省にいたころからオペラに尽瘁されているにかかわらず、ちょうどこの期間に公演の点はよく願っています。これは所得税だけで、あとは税をいじらなかつたものだから……。芸術祭の無税の問題と演劇が一番困っているようですので、何とかしたい。
宇野 演劇だけは、純という感じがありません。
内藤 演劇は昔段々ともうからないうえです。
安藤 大へん理想論なんだけれども、これは無税でいい、これはいづれの通りということになると、無税であるということが大へんつづなことになる。ほんとうに見たい人に、よけい見てもいい。
今 そんなこと、君みんな無税にしてもうために、参加申し込みが大へんだ(笑)。フランスの国立劇場に働くというところは、名譽職なんです。月給は安く、役者はみんな食えないので、政府が奨励して、映画に出てもらっている。
内藤 今でも俳優さんはみんなそうです。映画に出ています。
今 やはり国家の金というのは、出してやろうとする、数が多いからそんなに潤おわないな。
内藤 税金の方がききますね。
今 分けるとなつたら、お前だけにやるといわけにいかなくなつちゃう。大義明分を立てて、税金のがれだからというわけに細分すると、わずかなものです。それは重点的にはくれないよ。
安藤 フェスティバルのことに戻りますけれども、賞を出すときに、日比谷公会堂などの舞台でやるといわけになくて、非常に多勢入れようなところ、たとえば後楽園いやりでなければ、ああいりところでもやり得るようなものをやりながら、みんなに賞を出すとか、それからプロダクトのときには、大きな野外の青空の下で無料でやる、最後のときにもそういうことをやる……。
内藤 それを計画はしたのでけれども、十一月は寒くてできないのです。
安藤 芸術と言ったり、芸術祭と言ったりすると、何かうちの中でやっていたような気がするが、せめてプロダクトのときに、野外で何かしたら、またそういうものもたくさんあると思うのです。

しないのですよ。
牛山 藤原君はあれだけのいい仕事をやったのですし、歌い方はとにかく、あの功労は大したものですよ。
今 そういう人が、日本にはまだ多いふんいる。何も賞はもらわなければ……。
安藤 それから、映画や演劇のおかげで非常にたくさん税金が国庫に入っているのですから、それを少し……。
牛山 還元してもらいたい。
安藤 潤おわってくれたもののために、できるだけたくさんのお金を返していただいて、少くとも芸術祭のときには、入場料の減税、無税というところまで持っていってほしい。

牛山 そこまでいかなければいけませんね。
今 そこまでいくと、やはり東をどりというのはまずいですね。
内藤 今入っていないそうです。
牛山 初めから問題になって、入らなかった。
宇野 申し込みもないのです。
安藤 申し込みない方が、えらいと思う。
内藤 今、劇場難だからうきまきませんが、国立劇場ができて、国の経費でまかなえれば、うまくいくと思えます。ただ無料となると制限がありますから、やはり税金をなくすことですね。
今 僕がここで新聞社にやつけたら、この問題です。ところが笑をいうと、第一回は無税なんです。税をとったのと同じだった、税としてはとらなかつた。それで池田勇人さんと最後までけんかした。
牛山 大蔵省ですか。
今 とうとう最後に、税としては全部赤字に寄付ということになる。そこはだれも認めてくれなかったが、文部省と大蔵省とのけんかでは勝った。
内藤 せめて主権公演くらいは、無税にしてくれたらいいと思います。来年度は税法の根本的改正があるから、それ

内藤 バレエぐらいならできそうだった。夏ならいいのだがね。
尾崎 バイロイトみたいなものがあればいいんですがね。
内藤 それは非常ないい案だと思う。大衆に振るからね。ただ季節の関係で……。
牛山 ハリウッド・ボールみたいなものがあるといひすがね。シンフォニー・オブ・ジ・エアを後楽園でやったときは、ひどい目にあいました。寒くて、風は吹くし、音は聞こえず、姿も見えず。
内藤 一番いいのは、国技館ですね。野外みたいなもので、一万近く入りますからね。
今 ところが、ただのものは来る人というのがきまつている。
尾崎 江利チエミを出さなければ、満足しないのじゃないか。猿之助じゃだめだ。(笑)
内藤 ただで見るのが、ほんとうに文化の普及になるのかどうか、疑問ですね。
今 それは私も賛成だ。
牛山 実際に宮内庁の舞臺がそうです。皇居内に入るのが目的か、雅楽の管絃をほんとうに鑑賞するのかわからない。現に文化財保護委員会の主催で、日比谷公会堂でやったときは、人が来ない。(笑)
今 学生が、芝居が高いとかなんといひのは、りくつだけですよ。ほんとに安いものです。
内藤 百三十円で見るのだから、映画と同じだ。
安藤 歌舞伎の三階が八十円なんです。
今 文部省が幾らく安くして、見やしませんよ。僕が教師をしていいたときに、歌舞伎実習というのがあって、三宅周太郎さんが連れていったが、いざとなると学生が来ないのだ。
内藤 やはり金を出して見るのがいいのじゃないかな。
今 学生を安くしろといひけれども、何の時機でいうのか、それなら僕はただで見てやるといひけれども、来ないです。
内藤 大へん長時間ありがとうございました。

文部省芸術祭参加映画一覧

※印は彩色映画
()内は製作会社及び監督者名

昭和27年度(4本)	昭和26年度(6本)	昭和25年度(9本)	昭和24年度(8本)	昭和23年度(5本)
人生劇場(東映・佐分利信) 大仏開眼(東映・佐分利信) 大仏開眼(東映・佐分利信)	源氏物語(東映・吉村公三郎) 源氏物語(東映・吉村公三郎) 源氏物語(東映・吉村公三郎)	雪の海(松竹・大庭秀雄) 雪の海(松竹・大庭秀雄) 雪の海(松竹・大庭秀雄)	花の素顔(松竹・清水宏) 花の素顔(松竹・清水宏) 花の素顔(松竹・清水宏)	破戒(松竹・木下恵介) 破戒(松竹・木下恵介) 破戒(松竹・木下恵介)

昭和30年度(15本)	昭和29年度(10本)	昭和28年度(13本)
青春の墓(松竹・波谷実) 青春の墓(松竹・波谷実) 青春の墓(松竹・波谷実)	二十四の瞳(松竹・木下恵介) 二十四の瞳(松竹・木下恵介) 二十四の瞳(松竹・木下恵介)	花の生涯(松竹・大曾根辰夫) 花の生涯(松竹・大曾根辰夫) 花の生涯(松竹・大曾根辰夫)